

子供は両親に何を与えるか

——ボツサードの研究を中心として——

大阪学芸大学

小川正通

一、序

家族という形態は、既と第一次的集團ともいわれ、人間の歴史とともに古い。その構造・機能は、時代・社会によつて変遷・相違があり、構成メンバーや機能は、縮小化の傾向を辿つてゐるが、今日の文化社会においても、依然として家族は、その基礎的単位として存続しており、なお将来とても継続することであろう。

われわれは家族のうちに、子供として生れ、親に養われ、生活し、やがて新しい家族を形成し、子供を産み育てて、家族のうちに死んでいくのである。家族は血縁的・運命的・緊密な小共同体であつて、その中で子供は、家族の未来を担つてゐる。ヘーゲルにあつては、「子供は家族の最高の全体性を現わし、自然的人倫の段階においての絶対者・永遠なるもの」であり、ゲゼルは「子供は人間史の結論でもあり序文でもある」と述べてゐる。わが国は古来「まさる皇子にしかめやも」の愛育の伝統をもつといわれ、親はわが子に

対して、盲目的な愛情さえ示しがちであつた。それはとにかくして、或る学者は「未婚の人は $\frac{1}{3}$ の生活、結婚した人は $\frac{2}{3}$ の生活、子供をもつて初めて $\frac{3}{3}$ 即ち完全な生活」と説いてゐる。さて、「親が子供に与える影響」については、既に相当の業績が見られるが、「子供が親に与えるもの」而も「子供を中心とした子供の親への影響」に関する研究は、なお不十分のようである。——わが国の俗言では、「子をもつて知る親の恩」とか「子はかすがい」等といつてゐるが、この未開拓な分野を切り開いた研究として、ベンシルベニア大学の社会學教授ボツサードの「児童発達の社會學」(Bossard; The sociology of child Development 1943)中の一章をあげ、その大略に多少私見をも加えて、解説を試みたいと思う。この種研究の立ちおくれの理由としては、彼自身も大人の自己中心的主觀的態度によると、指摘している。

二、子供が親に与える特殊的（個別的）影響

(1) 子供の特徴——男子の誕生を願つて男が生れたか、或は希望しない結果となつたか。両親・祖父母の誰に似ているか。心身の発育がノーマルであるか、すぐれているか、おとつているか等。

(2) 親としての心がまえ・準備如何——両親が二〇才未満の若い時と中年を過ぎてからとでは生れた子に対する態度が違う。養育するわが子よりも情緒的に未成熟な親さえなくはない。また種々の養育的・経済的準備の未だ整わない親もあり、子供の数こそ問題であろう。

(3) 社会・経済的条件の反映——子供の誕生を歓迎する社会、産めよふやせよの時代と産児制限を必要とする社会・時代とでは、子の誕生に対する親の態度も自から違つてくる。幼児殺しの慣習をもつ原始民族もある。「子宝」思想のあるわが国では、多子家族のうちに、「一ひめ二太郎」といわれた。その「一ひめ」は或は育てのテストであり、次の「太郎」こそ伝統的な家の後継者として、最も祝福されたのである。女子の母性本能についても疑惑があり、子供への親の関心は、大部分が子の出生後に起る。(4) 可愛いダイナミックな性格——この種研究を困難とさせてくる一因でもあるが、親子関係は相対的であり、可変的・発展的過程であつて、従つてそのうちに、親子ともにバーンナリティーは、変化・発展し得る。親の子供に対する態度も、必ずしもコンスタントとはいえない。ひどく喜ばれた子供が二、三年後には、好まれなくなつたり、初め怒りつけられた親が子を溺愛するようになる。

三、子供が親に与える一般的(共通的)影響

子供の誕生が人員の増加のみでなく、人間関係、家族内の相互作

用の範囲と複雑さを増すのは当然であり、社会学的見地からの根本問題である。

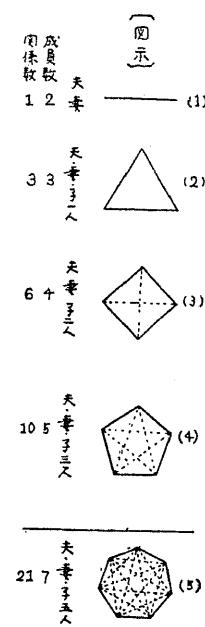
(1) 家族の相互作用の法則

家族の成員数と成員間の相互作用は、数学的法則で示される。即ち各家族のうちに、数学的二つの変数が想定され、その一つは家族の成員数、他は成員間の人間関係の数であり、家族集團に新しい成員が参加する時、次の如き法則が成立する。

〔法則〕 家族集團に一人が加わった場合に、成員の増加は、算術級数的であるが、人間関係の増大は、三角数的である。

$$[\text{公式}] \quad X = \frac{y^2 - y}{2} \quad \text{成員数 } y \dots 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, \dots$$

$$[\text{例}] \quad 10 = \frac{25 - 5}{2}$$



(5) どうぞよろしくは(1)～(4)を描いてあるが、多子家庭の実例を考え(5)を附加

(II) 法則の説明

(1) 人間関係の増加は、成員のそれを上まわり、家族集團が大きいほど、不均衡が激しくなる。幼児にとっては、中位の大きさ五一六人家族でも、関係係数は一〇一五だから、相当複雑である。

人子の時の弟妹の誕生は、関係数の急増となり、また祖父母や使用人等の新参加は、関係に質的变化をも加え、所謂「親子水入らず」でなくなり、新環境への順応を困難にし、子供に神経障碍を起させることもなくはない。「年寄育ちは三文安」は、この意味からも解される。(2)逆に、家族成員の喪失は、相互作用過程の激減となるが、小家族の場合とくに問題である。即ち四人家族の一人減は、関係数六から三(1/2)減、三人家族の一人減は、三から一(2/3)の減少となる。親の死亡、歿召、離婚等は、とくに家族への影響が大きい。(3)昔の大家族制の検討に役立つ。昔ローマのクインティリアンは、「人間性の探求には、一つの家族で十分な大きさだ」といつたが、故あることである。一世紀前のアメリカでも、祖父母・おじ・おば・いとこ等を家族のうちに含み、関係数四五の一〇人家族が決して稀でなかつた。然しだ大家族の人間関係の複雑さにたえきれず家出した人、職業選択が家族数と関係ありと認められるものもなくなはない。

(4)今日の典型的な家族は、アメリカで四人家族。人間関係六であり(わが国では一世帯当たり約五人・関係数約一〇)一世紀以前と比較して、関係数に大差を認めざるを得ない。小家族への変化は、家族生活全般に革命的影響を及ぼし、子供の社会化、家族成員の社会情緒的安心感、青年の政治的活動への要求等も、これと関係ありといわれている。(5)子女の増加に伴い、家族生活内の社会的経験は拡大しても、それに応じた親密関係が拡張されると限らない。子供の誕生が或る家族に対し、生活の豊かさを保障しても、他の家族には、親和的包容力の限界に突き当らせ、経済的困窮に陥らせ、生活の崩壊へと導く。

(6)数学的公式としてのこの法

則も、厳密には数学的正確さを示さない。元来、人間関係は量的・質的両面に亘つており、数学的公式で律するには、余りに多様多次元的であるからである。従つてこの法則も、家族生活の複雑な過程の近似値、成員数に基く家族関係移動の一般的比率を示すに過ぎない。

四、子供が親に与える一般的(共通的)影響(続き)

(三) 家族への関心の拡大

子の誕生は、親をして家族への関心を発展させる。一般に第一児の誕生は、親が前に考え及ばなかつた事象に注意を向けさせ、或は考へていたとしても、新しい意味を賦与する。第一は、家庭経済に関する限り、父親は己の職業に真剣味を加え、経済上の長期計画の想を練り、従来無視した生命保険へ加入し、住宅に関する野心も盛んとなる。また地域社会への関心増大し、とくに子女の教育的環境としての適否を吟味するに至る。ここで所謂「基地の子」の現況や「孟母三遷」の故事に思い当たる。もつとも英のラッセルは、「子供のないうち多くの人々は、公共的精神に満ちているが、一度子をもつと、家族の福祉にのみ没頭してしまう」と、極端な家庭個人主義的傾向に対し警告を發している。わが国でも「子孫のために美田を買わす」との教訓がある。然しほゞサードによれば、「あとは野となれ山となれ」という如きは、皮肉な独身男の思想で、決して親のノーマルな感情ではないと。

(四) 長期に亘る情緒的満足と再生の機会

親に生命の連續に対する情緒的満足感を与える。即ち子供の成長

発達への永続的関心を供し、未来への希望に生きらせ、その意味で親を幸福感にひたらせるからである。とくに親が老境に入つた時、然りである。階級移動・一獲千金の機会に恵まれたアメリカと封建的家族制度下の立身出世主義のわが国とは、この点では大差がないかも知れない。親は子供の生れる前から、或は男或は女と期待するばかりでなく、さらに自己の再びもどらぬ人生の失敗を、子にとりもどさんと望み、所謂「見果てぬ夢」をわが子に見ようとする。その実、青年期の子と親とは、屢々ジエネレーションの断層の両岸に立つてゐるのであるまい。

(五) 子供(人間発達)への支配

人間の子供は、動物の仔と比較する時、幼児期は長く、無力で親に依存せざるを得ない。——それだけ陶冶性が大きいのだが、従つて乳幼児は親に全面的支配権を譲渡している。ここに親の権力意志は、十分に満足されている筈である。とくに家族を国家に直結し、子供を人格として尊敬しない全体主義国家では、親の立場は愈々独裁的・圧倒的となる。幼児自身は、僅かに、自己の意のままになる人形・玩具・小動物において、権力意志を満すに過ぎない。それに反して、親は家庭外で受けた圧迫を、帰宅後屢々子供に對し爆発させ、うつ憤をわが子において補償する。ここで親権が問題となるのだが、親の特權はまた親の自己反省への転機ともなる。子供の言行が「親を映す鏡」であり、道徳的価値判断が自己に依存することに驚き、所謂「負うた子に教えられる」ことも少なくない。かくて親たるの責任の自覚、人間性発展へと誘導する機会となる。

(六) 生命過程及び人生の意味への洞察

人間の成長発達の過程は、自己においてでなく、つとめれば、わが子において比較的に容易に、客観的に觀察・理解される。科学者にとつては、とくに絶好の機会であつて、その結果による學問への寄与も決して少くない。また愛が愛に呼應する眞実の親子關係を通じて、自己の使命、(人間存在)人生の意義を把握し、所謂安心立命の境地へも導くのであるまい。

五、むすび

以上、家族の発展に子供が果す役割、即ち親へのプラスの面に重点を置いて種々述べてきた。然しマイナスの面については、必ずしも論議がつくされていないし、さらにそれ等は、子供の発達段階別にも検討されるべきであろう。もとより家族の制度・内容、文化的・社会経済的背景・条件を異にするわが国、とくに戦後の今日においては、親子關係の緊張・錯雜は甚だしく、「まなかいにもとなかかりてやすいしなさね」愛児が、親に対し日々多くの心配を与えている。従つてこれらの事情に關し、徹底的な研究・調査が要請される。けんきよな立場では、われわれは今日でもルッソーとともに、「子供というものを少しも理解していない」といえるのであるから「親の喜びは秘密であり、同様に悲しみも怖れも秘密である」とは、ベイコンの言葉である。然しこの秘密の扉を人間形成・人間理解への一助として、子供中心の立場から、是非開いていきたいと考えるものである。